

## 『アメリカ的理念の身体』と宗教思想史研究の可能性

増井 志津代

アメリカはピューリタニズムの影響による強い宗教的ヴィジョンと共に出発しながら、国制としては政教分離による史上初の世俗国家として創られた。基盤となった「理念」が、「身体を纏う」(11)<sup>1)</sup>過程を捉え、アメリカ史の中で検証することが本書の目的とされる。著者は、日本におけるアメリカの宗教と政治に関する議論が「標準理論」の十分な咀嚼を経ずに「修正理論」に飛躍してしまいがちなことを指摘した上で、あえて「標準理論」の提示を本書の中心課題とする。議論の出発点となるのはピューリタニズムが中世から受け継いだ思想の連続性で、理念がアメリカでどのように制度化、社会化され独特な形態を獲得していったか、歴史的な展開が論じられる。

本書で読者が出会うのはペリー・ミラーやサミュエル・エリオット・モリソンという今では懐かしい思想史研究者、そしてイェリネック、ヴェーバー、トレルチといったある一定の思想パラダイム提供者達である。アメリカ研究において思想史が「白人男性中心主義」として批判されてから久しい。1960～70年代には新社会史の台頭によりジェンダー、レイス、エスニシティ研究が隆盛し、1980～90年代にはカルチュラル・スタディーズにその流れは引き継がれ、2000年代はトランスナショナル・スタディーズが台頭する。<sup>2)</sup>こうした中、アメリカ研究では既に忘れ去られていた観のある思想史研究が再度復興しつつあることを本書は予感させる。合衆国のアメリカ研究に目を向けると一時は瀕死の状態にあった思想史は、最近ではジェイムズ・クロッペンバーグによるプラグマティズム再考、デイヴィッド・アーミテージによる環大西洋政治思想史研究などを通して蘇りつつある。本書の試みは、こうした思想史リヴァイヴアルの日本における新たな展開を期待させる。

本書の特徴は、宗教と政治、社会の関わりが、根源にある思想から丹念に解釈された上で、アメリカ的事例の個別分析へと進むため、「理念」が「身体を纏う」様が具体的に検証される構成になっている点である。大きな思想の枠組みが分析紹介された後に実証的な研究が続くので、読者は理念を具体的な歴史事例を通して確認することになる。ここでは、本書を神学、宗教史、ニューイングランド研究史の観点から批評する。三部構成の内、本稿で主に取り上げるのは第一部「寛容と良心」をめぐる思想的な議論、そして第三部「信教の自由」における事例研究である。

<sup>1)</sup> 森本あんり『アメリカ的理念の身体—寛容と良心・政教分離・信教の自由をめぐる歴史の実験の軌跡』(創文社、2012年)。本書よりの引用は括弧内に頁数を記す。

<sup>2)</sup> アメリカ研究における研究方法の変遷については以下を参照のこと。“Introduction,” Eric Foner and Lisa McGirr, *American History Now* (Philadelphia: Temple University Press, 2011), vii-ix. 及び同書所収、Erez Manela, “The United States in the World,” 201-3.

## 理念の継承——ピューリタニズムと中世スコラ学の関係

第一部で、著者は「アメリカ市民社会形成における宗教的文脈」として、ピューリタニズムに注目し、その基本的な神学がスコラ学を継承していることを示す。

第一章は「中世的寛容論から見た初期アメリカ社会の政治と宗教」と題され、契約思想により構成された閉鎖的なゼクテ集団における寛容論について考察する。カルヴァンのジュネーヴと同じく、不寛容社会の代表のようにみなされるマサチューセッツ湾植民地は、信仰告白により参与の意図を明らかにした人々による契約共同体であったので、権利や保証は構成員にのみ与えられた。このような閉鎖社会と寛容は一見相容れないものと思われるのだが、元来、寛容論は閉鎖的なキリスト教共同体であった中世ヨーロッパで、異教徒や異端者をどのように扱うかをめぐり展開されたと言著者は論じる。マサチューセッツ湾植民地では、中世ヨーロッパと同じく、寛容は「より大きな悪を防ぐための便法」(22)であり、統一的な価値秩序を守るために必要であったのだと説明される。こうした社会での寛容は、「中心的な価値を維持するためのシステム」で、その中心を脅かすものに対して社会は不寛容となる(27)。時代の変化と共にマサチューセッツ湾のゼクテ的な性格はやがて弱体化していくのだが、その変容の可能性を近代や啓蒙から読み解くのではなく、中世思想から継承した寛容論を中心に解釈するのが本書の議論の最大の特徴となる。

確かにプロテスタントは、その反ローマ主義的傾向から中世を暗黒の時代とみなしがちである。宗教改革者が主張したローマから聖書への権威の移行は、改革思想が急進になるほど強調され、中世以前の初代教会の時代の方がより良き過去とみなされる。しかし、本書では、中世から新旧イングランド・ピューリタンへの思想的な連続性が指摘される。中世スコラ学の間であった大学で知的訓練を経たピューリタン指導者たちがトマス・アクィナスの神学思想を継承したのは当然なはずなのだが、プロテスタント史家の視点からこの認識が抜け落ちることはしばしばある。著者は、こうした認識の盲点を指摘し、トマスの神学からピューリタンへと続くスコラ学の継承を強調するのである。<sup>3)</sup>ピューリタンの社会ヴィジョンと共同体形成過程において、特にスコラ的な良心論(Case of Conscience)、決疑論(Casuistry)が大きな影響を与え、理念の身体化、すなわちアメリカ社会への適応においてどのように作用したかが第一部の大きなテーマとなっている。

第二章「誤れる良心と愚行権」、第三章「誤れる良心と偽れる良心をどう扱うか」では、良心を「共知」(con-science)として捉えるトマスの思想を継承したピューリタン神学者が、それをどのように適応していったかが検証される。トマスはその良心論において「知性の

<sup>3)</sup> マルティン・ルターは、人文主義のカリキュラムを備えたドイツ最初の大学であるウィテンベルク大学(創立1502年)の教師で、カルヴァンもパリ大学で新しく取り入れられた人文主義のカリキュラムによる教育を受ける。人文主義とプロテスタントのこうした結びつきから、プロテスタント研究者は人文主義と伝統的スコラ学を対立的に捉える傾向がある。例えばマーゴ・トッドは、17世紀オックスブリッジで新スコラ主義が流行し、特に1640年代トミズムのリヴァイヴアルが起きたことを指摘しながらも、これが人文主義カリキュラムに取り代わったのではないと敢えて強調する。これに対し、スコラ主義と人文主義は対立したわけではなく共存したとルイス・スピッツは主張する。Margo Todd, *Christian Humanism and the Puritan Social Order* (Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1987), 48-50; Lewis W. Spitz, *Luther and German Humanism* (Hampshire, Great Britain: Variorum, 1996), 393-94.

能力態 (habitus) の一つ」である「良知」(synderesis) を、自然的な道德を知る能力であり、あらゆる人間に生来与えられているとする。「良知」を持つ (あるいは与えられた) 個人は、他者に対して内面の自由を持つ。しかし「良知」は所与のものなので、自己に対しては個人を虜にする場合もある (34)。つまり「良知」は「公知」——共有される知——なので、誤った良心であっても従わなくてはならないといった自律的な特徴を持つ。こうした良心論を基本として、ピューリタン神学者ウィリアム・パーキンズやウィリアム・エイムズがそれぞれに良心論を構築し、生活実践のための決疑論を展開していく。ピューリタンはプロテスタントにおける実践神学 (Practical theology) の発展に貢献するが、その基となったのがトマスより継承した良心論であったということになる。

しかしながら著者も述べているようにパーキンズの良心論のひとつには、副題に『人はどのようにして自分が神の子であるかどうかを知るか』とあり、明らかに選定 (election) の確証の問題が焦点となっている (40)。さらにこの副題は、『神の御言葉による解決』と続く。<sup>4)</sup> パーキンズによる良心論では、人が神の法 (聖書) を知るにより、自らの内面をその法の光に照らし合わせて感じる恐れ (fear) や謙卑 (humiliation) といった心理的な変化の過程が重要となる。つまり、回心における個人的な感覚や感情の動きが詳述され、どちらかという心理的考察で、形而上学的な良心論ではないように思われる。パーキンズの良心論に盛り込まれている救済準備説 (Preparationism)<sup>5)</sup> は、ピューリタニズムに特徴的な回心の形態で、個人の心理体験と密接に関わる。もちろんこれは聖化の過程を示すもので、回心の結果、倫理的な生活が目指されるようになるので「良知」と通じると解釈できるが、いずれにせよ選定である以上、適応できる者の数は限定的である。マサチューセッツ湾植民地においてはこのような霊性の吟味の枠組みをトマス・シェパードが継承し、教会契約参入時における回心体験の公の告白という習慣が導入される。<sup>6)</sup> こうした理念が「身体を纏う」と、どうしても閉鎖的な社会となることは避けられない。

ピューリタンの良心論はパーキンズを経て一方はシェパードが展開させた救済論、もう一方はエイムズ、コトン、ウィリアムズ的な公共倫理模索へと、二つの方向への展開をみたと考えられるように思う。余談であるが、パーキンズの良心論が示す回心における心理や感情変化の分析は、ジョナサン・エドワーズの宗教的情感論からウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』(*The Varieties of Religious Experience*) へ、またハビトゥスとしての「良知」理解はより包括的な社会規範、習慣の模索から、パースのプラグマティズムへと継承されていくものと、思想史上の系譜をたどることも可能かもしれない。

いずれにせよ、17世紀マサチューセッツのピューリタンによる共同体形成において「良知」(synderesis) の解釈が大きな意味を持ち、コトンとウィリアムズの主張の違いにより

<sup>4)</sup> William Perkins, *A Case of Conscience, the Greatest that Ever Was: How A Man May Know Whether He Be the Children, or no. Resolved by the Word of God* (London: Printed by John Legatt, 1626).

<sup>5)</sup> 救済準備説については、次の研究書に詳しい。Norman Pettit, *The Heart Prepared: Grace and Conversion in Puritan Spiritual Life* (New Haven: Yale University Press, 1966).

<sup>6)</sup> ケンブリッジ教会の信仰告白集。Michael McGiffert, *God's Plot: Puritan Spirituality in Thomas Shepard's Cambridge* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1994); David D. Hall, *Puritans in the New World: A Critical Anthology* (Princeton: Princeton University Press, 2004), 120-34.

神学思想を共有しながらも異なる政治社会体制が生まれていったという説明には説得力がある。

第三章、第四章ではロジャー・ウィリアムズの良心論が中心となる。スコラ学からピューリタンへと継承された「共知」(con-science)としての良心はウィリアムズにおいて、「万人の平等へのまなざし」へと発展する。著者は、ウィリアムズが保護し、また独立革命期にはマディソンやジェファソンに影響を与えた宗教的少数派のバプテストやクエーカーによる「良心の自由」に関する主張について論じ(74-76)、さらにウィリアムズとインディアンとの関係に着目する。

マサチューセッツ湾を追放されたウィリアムズは先住民と共に暮らし、やがて『アメリカ現地語案内』(*A Key into the Language of America*)を著したが、彼らの宗教的世界観からも、他者の宗教的行為を尊重することを学んだという(79)。インディアンの徳性をはかるにおいても「良知」の概念は適応されただろうし、こうした異文化交流の中でコトンやマサチューセッツ湾主流派とは異なる「良心の自由」(liberty of conscience)へのさらなる思想的展開があったのだと思われる。ウィリアムズはその良心論と自らの経験から「政治権力と宗教権力を分離させて良心の自由を守ることを、市民社会からの現実的な課題として強く認識していた」(79)と著者は論じる。

「良心の自由」や「万人の平等」は、独立革命後のアメリカが掲げる政治理念となるが、これは18世紀啓蒙主義を経由して獲得されたものと通常理解される。しかし著者は、中世からピューリタン神学を経て受け継がれたキリスト教思想のアメリカ的な展開の中に、こうした価値観のルーツが見出されることを指摘する。さらに、この「良心の自由」は個人の自由な選択と関係するものではなく、外在する「なにものかの呼びかけに応えることを求められている」(82)、個を越えたいわば捕われの身の自由であるのだとする。

## アメリカ的身体の形成と福音主義

第三部は「信教の自由」と題され、自由の理念がアメリカにおいてどのように展開していくかがテーマとなっている。大覚醒の結果アメリカ的福音主義が誕生し、「理念」の身体化はまた別の段階を迎えることになる。

まずピューリタンが創立したハーヴァード大学が取り上げられ、著者は、この大学が単に教会指導者の教育だけではなく、教養教育のカリキュラムを備えた社会的指導者養成機関であったことに注目する。ハーヴァードと同じくイエール、プリンストン等、改革派にルーツを持つ大学は、神学教育と共にエリート養成校としてその出身者は文化的主流を担う。こうした大学の教養主義、知性主義は、やがて、18世紀第一次大覚醒を経た信仰復興運動(リヴァイヴァリズム)の台頭の中、民衆による反発を招いていく。

第11章ではリヴァイヴァリズム的キリスト教がアメリカの反知性主義の一つの基盤となっていることが、ホフスタッダーの先行研究を評しつつ歴史的に論じられる。反知性主義がアメリカで力を持つのはアメリカが「あくまでも民主的で平等な社会を求めるからである」(234)と、反知性主義を平等な社会における民衆の「権利問題」と結びつけて論じ、その背後で信仰復興運動が宗教的権威を覆すことにより民衆的なエネルギーと共闘していく流れがとらえられている。



福音主義は18世紀の第一次大覚醒運動にルーツを持ち、その代表的指導者がジョナサン・エドワーズとジョージ・ホイットフィールドである。第10章では、エドワーズに注目し、大覚醒と「信教の自由」の関係が論じられている。リヴァイヴァルの結果誕生した「福音主義的キリスト教」は「アメリカ独自のキリスト教の現実態で」、19世紀にはチャールズ・フィニー、さらに20世紀大衆伝道者、そして現代のテレビ伝道者にまで継承されていく(190)。

アメリカ福音主義の成立におけるエドワーズとホイットフィールドの重要性に関する著者の議論に対して異論はない。しかし、本書では福音主義の反知性主義があまりに強調されているように思われる。著者は福音主義の芽生えをイエール大学にたどるが、そこで信仰復興を導いたティモシー・ドワイトが懸念したのは理神論の影響であった。福音主義は、その極端な形態において反知性主義に向かったとしても、基本的には正統主義の復興を目指した宗教的情感の回復運動としてもとらえられないだろうか。

ティモシー・ドワイトの祖父エドワーズは、説教「怒れる神の手の内にある罪人」(“Sinners in the Hands of an Angry God”)の中で聴衆に恐れ(fear)の感覚を引き起こすようなレトリックを意図的に用いている。これはパーキンズやシェパードがその回心モデルの中で示した罪深さに対する恐れ of 感覚と重なる。引き続き、絶望や謙卑といった心理の動きを経て悔改めへと向かう流れには、もちろんパーキンズのように形態論的ではないが、救済準備モデルと呼応するところもあるように思われる。<sup>7)</sup> エドワーズが示した宗教的な情感に訴えつつ罪の悔改めを促す方法は、福音主義的な説教の特徴となっていく。チャールズ・チョウンシィによる熱狂主義(enthusiasm)批判であげられたように、静的なエドワーズは動的なホイットフィールドと表現方法は異なるものの、理性というよりも感覚に働きかける修辞技巧を駆使したと思われる。宗教的情感の重視はパーキンズやシェパードから継承した特質ではないだろうか。

このように考えると、福音主義はその一部が反知性主義に向かったとしても、宗教的情感の回復運動であったと解釈できる。18世紀理神論のくりひろげた理性中心主義に対抗した大覚醒運動は、19世紀に文化的主流となる感傷主義やロマン主義に先行した宗教運動としてもとらえることができる。ハーヴァードがユニテリアンの拠点となっていく中、知性すなわち「あたま」を強調するキリスト教が失った「こころ」への注目が福音主義運動では主流となった。19世紀に流行した女性作家による感傷小説は、福音主義やリヴァイヴァルと結びついた文化現象とされるが、福音主義は宗教的情感の回復と共に新しい文化の流れを産み出していった。<sup>8)</sup>

<sup>7)</sup> パーキンズを始めとする救済準備論者とエドワーズの違いについては、以下を参照のこと。森本あんり『ジョナサン・エドワーズ研究—アメリカ・ピューリタニズムの存在論と救済論—』(創文社、1995年)、71-81頁。

<sup>8)</sup> アメリカ福音主義リヴァイヴァルと文学の関係については次の研究がある。Jane Tompkins, *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860* (Oxford: Oxford University Press, 1986); Shirley Samuels, ed., *The Culture of Sentiment: Race, Gender, and Sentimentality in 19th Century America* (Oxford: Oxford University Press, 1992). ユニテリアンと福音主義の文化的相違については、以下を参照のこと。Lawrence Buell, *New England Literary Culture: From Revolution through Renaissance* (New York: Cambridge University Press, 1986).

身体論的にとらえるのであれば、信仰復興における霊性の強調は、身体のレスポンス——例えば歌や音楽も含む——を踏まえた信仰表現へとつながり、アイザック・ワッツやチャールズ・ウェスレーによる新しい賛美歌が誕生し、これによりプロテスタントの礼拝は大きく変化する。宗教音楽の新しい展開は理性中心主義により失われた宗教的情感と身体性の回復の現れとして理解できるのではないだろうか。

さらに、著者はエドワーズの書いた著作を見る限り、大陸敬虔主義との接点はないとする。神学的著作には見られないにせよエドワーズが伝記を著したデイヴィッド・ブレイナーの宣教活動や霊性は、敬虔主義と連動するように思われる。エドワーズ自身、ノーサンプトンの教会を追われた後は辺境で一時インディアン宣教にたずさわっている。プロテスタントで最初に本格的な宣教活動を展開したのは大陸敬虔派であるが、たとえばモラヴィア派宣教師は1730年代西インド諸島を巡り黒人奴隷への宣教に、また1740年代には北アメリカでインディアン宣教に赴いた。このように見ると、敬虔派とエドワーズの間には宣教の熱心さという接点がある。

第10章、第11章では、知性/反知性という二項対立的な構図が際立っているように思える。前述したように、ホイットフィールドが開始した即興的で身体を駆使した説教は、反知性的の一言で処理できるものではなく、エドワーズ自身が重視した霊性とその表現にも関係している。ホイットフィールドについては、ベリー・ミラーを筆頭に、アメリカのピューリタン研究者は不当なほど低い評価を与えてきた。例えば、11章で引用されている『ハーヴァードの三世紀』(*Three Centuries of Harvard*)は、1936年、大学の300周年記念出版物としてモリソンにより書かれたものでハーヴァード側の視点に立っているのは明らかである。ミラーやモリソン等によるホイットフィールドの低評価は、ハリー・スタウト、ジョージ・マーズデンといったイェールに関係の深い研究者により修正されている。<sup>9)</sup>

12章は19世紀キリスト教の女性化と20世紀的反動としての男性化がテーマとなっている。アン・ダグラスの古典的な名著『アメリカ文化の女性化』(*The Feminization of American Culture*)、クリフォード・ブトニーの『筋肉質のキリスト教』(*Muscular Christianity: Manhood and Sports in Protestant America, 1880-1920*)を始め、女性学やカルチュラル・スタディーズの研究を紹介し、キリスト教とジェンダーの関係が賛美歌や視覚的イメージを分析しながら論じられている。

「筋肉質のキリスト教」による男性教会出席者の増加については、世界大戦における国体の方針にアメリカのプロテスタント教会が思想的な協力をしていた結果という側面もあると思われる。スポーツにより鍛えられた強靱な肉体は、兵士に要求されるもので、これに教会が協調していったのだろう。また、20世紀リヴァイヴァルから生まれた男性運動「プロミス・キーパーズ」が強調するのは、ヘテロ・セクシュアルな結婚による伝統的家庭を中心としたモラルである。これは19世紀の領域思想の延長線上にあり、キリスト教会の女性化と男性化現象はいずれも思想的な変化というよりは史的連続性の現れだと判

<sup>9)</sup> Harry Stout, *The Divine Dramatist: George Whitefield and the Rise of Modern Evangelicalism* (Grand Rapids: Eerdmans, 1991); George Marsden, *Jonathan Edwards: A Life* (New Haven: Yale University Press, 2004). マーズデンの著書209ページに、ホイットフィールドとエドワーズの関係についての記述がある。

断できる。即ち、19世紀以降、アメリカにおけるキリスト教の女性化と男性化は国体保持という目的において補完関係にあったとみなされる。

こうなると、福音主義的キリスト教の19世紀以降の帰結は、国体保持と密接に関係するということになるだろう。宗教的ヴィジョンはアメリカという身体を身に纏い、ついにはその内部に心地よく埋没してしまったのだろうか。アメリカの宗教性をピューリタニズムにまで遡ると、そこには良心を「良知」(synderesis)とする思想があったことが確認できた。これはまた「公知」であり所与のものとみなされ、それを与えられている個人は自身が囚われてもこれに従うべきとされたことを本書は示した。こうした「自己の外にある何ものかの呼びかけ」(82)に倫理の拠り所を求める公共的な宗教性が取り戻されるまで、内向きのキリスト教は合衆国において引き続きその勢力を保ち続けるのかもしれない。

本書は、宗教と政治についての「標準理論」提示を目的とするが、理念の詳細な分析によりそれを達成しつつ、実践的な事例分析を組み合わせることで研究の多面的な切り口を示すことに成功した。第一部、第二部に示された思想の変遷についての分析は、著者の代表的な研究書『ジョナサン・エドワーズ研究——アメリカ・ピューリタニズムの存在論と救済論——』と共に、この分野を深く探求するための重要な宗教思想研究となっている。さらに、理念が「肉体を纏う」さまをトピカルに扱った第三部を、通史『アメリカ・キリスト教史——理念によって建てられた国の軌跡』を参考に事例研究として読めば、より包括的な宗教史理解が可能となる。

骨太な「標準理論」が本書により提供されたことで、宗教と政治、社会をテーマとする日本におけるアメリカ研究に、さらなる挑戦的な「修正理論」を迎える準備が整った。新社会史、カルチュラル・スタディーズ、そしてトランス・ナショナル・ターンを経た今、思想史研究が新たな方向に進むことが予感される研究書がここに登場した。